

「越境」と「戦争の記憶」序説

—現代日本（2001-2011）における表象の考察のために—

宮田 文久
日本大学大学院総合社会情報研究科

“Border Crossing” and “War Memories” —Cultural Representation in Japan from 2001 to 2011—

MIYATA Fumihisa
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this thesis I would like to examine how the ideas of “border crossing” and “war memories” are interrelated in cultural representations in Japan, focusing on literary works in the last ten years. First, I will outline the discourse of border-crossing literature, tracing it back into the 1990s, and relate it to the recent discussion of “world literature.” Second, I will show the common ground of border-crossing literature and the discourse of “war memories,” referring to the discussion of “old wars” and “new wars” by Mary Kaldor. Finally, I conclude that this kind of study is necessary in order to understand how Japanese are trying to relate themselves to and cope with the situation at the beginning of the 21st century, in other words, how they are trying to move from detachment to commitment.

1.序

本論は、2000年代日本を中心とする「越境」と「戦争の記憶」の表象を考察し、現代における非政治的な「デタッチメント」の重要性を抽出するものである。テーマ選定の理由としては二つあり、一つは、「越境」と「戦争の記憶」それぞれの議論が未だ熟していないと考えられるからである。日本語文学の中で紡がれてきた「越境」という表象の発祥や、世界文学の潮流との対応への視点、一方での「戦争の記憶」の議論における、過去の戦争と「新しい戦争」の記憶が混淆している表象への説明——共に微細かつ綿密な言説は立ち上げられているものの、巨視的な議論が積極的になされているとは言い難い状況である。それぞれの議論の内容にも再考すべき点があると考えられる。「越境」に関しては、特殊な「越境者」たちによる表象を政治的に読解するに留まり、マジョリティが「越境」を成し遂げるような、いわば「内なる越境」と言える視点までは届いていない。一方での「戦争の記憶」をめぐる議論においても、過去の戦争の「継承」に焦点が絞られがちであり、

過去の戦争との「断絶」、あるいはその「断絶」と「新しい戦争」の表象との関連性などは未だ熟議されていない。

他方で、「越境」表象の担い手たちが「戦争の記憶」を扱っているという事実がある。さらに、我々がグローバル化以降を生きている日常的な越境者である以上、「越境」表象の担い手たちが抱える「戦争の記憶」を含んだ問題は、非常に普遍的な課題であると思われる。

この二つの問題系を結びつけるものとして提示したいのが、村上春樹が言うところの「デタッチメント」の概念である。村上が阪神淡路大震災・オウム真理教によるテロ事件を契機にして、現実社会から距離をとる「デタッチメント」から、ダイレクトに世界に働きかける「コミットメント」に移行したという一般的な理解は不十分であり、「コミットメント」は「デタッチメント」の徹底によってなされるということを本論では主張したい。そして、越境文学がなす「内なる越境」において、一方での「戦争の記憶」の表象の中で試みられる「断絶」において、

「デタッチメント」という在り方こそ逆説的に現実社会への効力を発揮できるという点を重視する。

筆者はこれまでに、上記の課題に具体的に向き合うため、西洋人初の日本語作家・リービ英雄が＜9・11＞を描いた小説『千々にくだけで』、デュラス／レネ『ヒロシマ・モナムール』をリメイクした諏訪敦彦の映画『H story』、岡田利規がイラク戦争開始時の渋谷の若者たちを活写した戯曲『三月の5日間』といった作品群を考察してきた。本稿では、それら具体的な作品群から一旦距離をとり、議論の総体を明らかにし、統括的な視点を用意したい。

2. 「越境」と「戦争の記憶」の表象の交点

2.1 「内なる越境」という視座

まず、第一の問題系における「越境文学」について、その発祥を追ってみたい。90年代以降にその潮流を形作った「越境文学」は現在までに一定の評価を得つつも、萌芽期にリービが述べていた「なにかとなにかのはざまにいる状態」([1992]、239)というポテンシャルは未だ十全に考察されていない。政治的に「境」に言及しなければ成立しない越境文学——それは、その表象の担い手たちが越えようとしている「境」を逆説的に強化してしまっている可能性さえある——の再考、そしてマジョリティから見るマイノリティとしての越境者たちという理解の枠組み、この2点が本節の課題である。

「内なる越境」について前もって述べておきたい。この「内なる越境」という物言いは、二人の作家に負う。越境作家の代表格であるリービ英雄が、自らの先達として評価している安倍公房と、リービと並んで越境文学の担い手とされる多和田葉子である。

安倍公房は、1968年『中央公論』11・12月号に、「内なる辺境」という原稿を寄せている。ユダヤ系作家を中心に、国家の「正統性」に反旗を翻す存在を、安部らしい錯綜したレトリックで論じるこの文章はしかし、その最終段において、明確にその論理を提示する。20世紀初頭、トルストイの死と共に「大地信仰の文学」は衰退期を迎え、カフカ、プルースト、ジョイスらが「異端」を表象し始めたと言語する安部は、一方での文学の無力を自覚しながらも、以下のように述べていく。

せめて、一切の「正統信仰」を拒否し、内なる辺境に向って内的亡命をはかるくらいは、同時代を意識した作家にとっての義務ではあるまいか。

大地をたたえる「祭り」は終り、しかし新しい広場は、まだ暗い。国境を超えた（ママ）ゲバラは死んだし、国境を失ったベトナム人は戦火に身を焦がしている。だからと言って、絶望するのはまだ早い。都市の広場が暗ければ、国境の闇はさらに深いはずなのだ。越境者に必要なのは何も光ばかりとは限るまい。（[1975]、98-99）

「内的亡命」の目的地として設定されている「内なる辺境」は、越境者にとって「闇」に支配されている場所である。それは「光」を信奉する旧来の思想から言えば「絶望」的に映るがしかし、安部は「絶望するにはまだ早い」と言う。単純に「国境」を越える意味での「越境者」を再考している彼の言葉は、もう一人、現在の越境文学の担い手・多和田葉子が、作家・川上未映子と交わした対話と反響する。「境界線の片方からもう一方を見るんじゃないで、その境界線上に立つ」という「狭間」の在り方を多和田は重要視していると述べ、その狭間を問いただす川上に対し、多和田は以下のように語る。

多和田 むしろ場所がないって感じなんじゃない？ いってみれば、狭間って存在しない場所ですからね。（・・・）

川上 それは、身体を移動させて言語を変えて、試みることもできる一方で、やろうと思えば、日常的にも可能なことだとは思いませんか。

多和田 はい、たったひとつの街に住んでいても、ひとつの言語しか知らなくてもできることだと思いますよ。（川上・多和田、150-51）

安部の言葉に引きつけられれば、国境を越えた身体の移動や、バイリンガルといった条件を満たさずとも、「たったひとつの街」という「闇」に支配されたポスト越境的な「内なる辺境」にすることで、「狭間」という表象は可能だと、ここで多和田は述べている。

2.2 「越境文学」の発生と拡大

「越境」という語が文学をはじめとした表象文化と共に使われ出したのは、日本では1992年頃だと思われる。それは、先述したリービ英雄が作家活動を始めてから約5年後、自らの立場を説明する中で用い始めたと考えられる。

1992年の『早稲田文学』4月号にて、彼は「越境」という概念を、80年代来の「国際化」論の翻訳、あるいは反発として用いている。

「越境」というとき、このことばが喚起するイメージは、「渡っていくこと」「超えていくこと」「入り込んでいくこと」ですね。しかし、非常に入りこみにくい文化の場合は、それを「入り込んでいこうとすること」といいなおしたほうがいい。最近、「国際化と文学」とか「移民と文学」といったことが話題になっていますが、ぼくは問題の立てかたが違うように思います。(・・・)

「越境」というのは、つまり、どこにも属さない、なにかとなにかのはざまにいる状態だということです。しかし、その「越境」を文学の問題として考えると、そのはざまにいる状態を絶望的にとらえるのではなく、むしろそのことによって、ふたつの文化を非常にアイロニカルにみることができる立場にいる、と考えることができる。([1992]、238-39)

ここでリービが反感を抱いている「国際化」という概念を文化的に論じている青木保[1999]によれば、戦後の日本文化の論じられ方において、「否定的特殊性の認識」(1945～54)、「歴史的相対性の認識」(1955～63)、「肯定的特殊性の認識」前期(1964～76)、後期(1977～83)という時期を経て、1984年以降、「特殊から普遍へ」という論理転換が為される中で「国際化」論が沸騰していったという。戦前の反省から日本文化を否定的に捉える視座が経済復興と共に転換していくが、しかし国際社会からのその経済的な過剰な発展へのバッシングが高まる中で、肯定的特殊性を普遍的なものへと再転換し、「国際化」によって再度国際社会へのアピールを行うという経緯があったわけだ。だが、その「国際化」論の中で「はざ

ま」という在り方が見失われているとリービは主張しているのである。

リービがこの発言をした1992年、現代日本文学の一つのジャンルとして、「越境文学」が成立し始めていた。リービ英雄の小説家としてのデビューが1987年、初の単行本刊行がこの1992年2月(『星条旗の聞こえない部屋』)である。前年1991年には多和田葉子がデビューしており、現在「越境文学」の担い手とされる作家が揃ってくる時期である。

並行して、南北アメリカをめぐるポストコロニアル批評の文脈から、国内のクレオール研究者たちが「越境」という概念に注目し始めていた。文化人類学者・今福龍太による『クレオール主義』刊行が1991年である(チカーノ文化を論じる章「文化の交差点で——越境論」を含む)。今福とも関係の深い管啓次郎が、アメリカの作家テッド・コノヴァーによる『コヨーテたち——越境するヒスパニック・アメリカ』を1989年に翻訳(原書は1987年)、チカーノのフェミニスト、グロリア・アンサルドゥーア「ボーダーランズに生きるとき きみは」を1991年に翻訳(原文は1989年)。やや異なる文脈ながらも、世界的潮流の中で、日本文学における「越境文学」を醸成する背景は成立しており、同時に、その輸入がクレオールの研究者／紹介者によって為されていたことが分かる。

田中敬子[2007]は、海外における越境論の系譜を二つの潮流に整理している。その一つは、エドゥアール・グリッサンらによって提唱されてきたクレオール論(およびそこで論じられる「アーキペラゴ(群島)」のイメージ)であり、もう一つは、アメリカとメキシコの国境地帯を中心に、チカーノ文化を考察する際に用いられる「ボーダーランド」論である。

これら二つの潮流が同時期的に流入してきた点に、日本の越境文学の特徴はあったと考えられる。今福・管ともに、チカーノ文化も含めた広義の混淆性におけるクレオールを紹介すると同時に、カリブ海のフランス領マルチニクを中心にしたクレオール文学という狭義のカテゴリーの紹介者でもあったことに留意する必要がある。これは、先述したクレオール文学の重要人物エドゥアール・グリッサン以降——先達としてのエメ・セゼールが提唱した、黒人

性を担保にアフリカ回帰を目指す「ネグリチュード」の概念を乗り越える形で——パトリック・シャモワゾーらが全-世界的なクレオール化／クレオール主義を目指したことともパラレルであり、その結果として、日本においては広義のクレオールと狭義におけるクレオール文学が同時に輸入されてきた結果であると考えられる。田中敬子の言に引き寄せれば、①マルチニックを中心にした「クレオール」論と、チカーノ文化を中心にした「ボーダーランド」を共に内包した広義のクレオール主義、②グリッサンらに代表される狭義の——しかし同時に彼ら自身もその普遍性を主張していく——クレオール論、その二つが一斉に「越境」を焦点にしながら輸入されてきた、ということなのだ。こういった背景の中で、「越境」という表象を受け止める下地は醸成されていた。実際に、1992年には『越境する世界文学』という、「越境」の表象のもとに世界文学を再考しようとする書物が河出書房新社より刊行されている。

その後、リービ英雄を中心にしながら「越境文学」という表象形態が存在感を増していくことで、事後的に、研究者によって、過去に遡った「越境文学」の系譜が考察されていく。青柳悦子[2001]の整理をもとに、「越境文学」を分類してみれば、以下のようになる。

①亡命タイプの移動モデル：

ナボコフ、アゴタ・クリストフ、ミラン・クンデラ、ラフィク・シャミなど

②ポストコロニアル文学：

V・S・ナイポール、サルマン・ラシュディ、マイケル・オンダーチェなど

③「移植型」の＜境界児＞：

カズオ・イシグロ、村上春樹、多和田葉子、水村美苗、リービ英雄など

また同時に、越境文学の分析に有用な過去の議論、あるいは越境文学を内包した世界文学の現状を考える上で有効な概念なども、後天的に関連づけることができる。ドゥルーズ／ガタリの「マイナー文学論」、デリダによる「他者の単一言語使用」をめぐる議論、ベンヤミンの「翻訳」論、多和田葉子が母語の外で

書く行為を捉えた「エクソフォニー」、スピヴァクからディモックへと、ド・マンの流れを継ぐ比較文学者たちによって議論されている「惑星思考」、ダムロッシュが読みの「モード」による再編を唱えた「世界文学」など——。これらの再検討を踏まえながら越境文学を捉え直すことは、今後の課題と言えるだろう。

2.3 当事者性を越えるために

90年代以降に発生した越境文学は、その評価を一定のものとはしつつも、一方で「越境者」たるマイノリティによる表象をマジョリティである読み手の側が享受するという構図も固定されてしまったようだ。その原因は越境文学を論じる側が「当事者性」を過剰に前景化したためだと考えられる。「ポジションを詰問する特権性を生み出す危険性」（富山一郎[1996]、260）とその内部の論者からも内省が生まれている。

グローバリゼーションの現在、マジョリティも「はざま」にいる越境者なのではないか、という仮説の上で越境文学を読み直すことはできないか。それが「内なる越境」の可能性である。

3. 「戦争の記憶」をめぐる新旧の問題

3.1 過去の戦争の記憶

エヤル・ベン-アリ[2010]によれば、ここ 20～30年の間に、世界的に「記憶ブーム」と呼ばれる動きが発生しているという。メアリー・カルドーの「新しい戦争」の議論とも共鳴するように、それはグローバリゼーション以降の国家のアイデンティティ・ポリティクスと関連している。それを現代日本の文脈に移せば、福間良明[2009]が語るところの「断絶」と「継承」の問題へと結び付けることができる。

もともと、福間が「戦争の記憶」の「断絶」と「継承」を語るうえで着眼しているのは、60年代において「戦争の記憶」を「教養」とした戦中世代と、これに反発した学生闘争世代の間におけるズレである。さらに、例えば2005年に青山学院高校の入試問題において、「語り部の話は退屈だった」という文章に対して設問が設けられ騒ぎとなったことなどを踏まえれば、その「断絶」と「継承」の問題は現在まで継

続していると考えられるだろう。¹ だが、語り継ぐという「共同体主義」の解除は可能かどうかという北田暁大による問い（大澤・北田[2008]）への応答は、未だに宙吊りにされたままである。語り継ぎによる「継承」という営為が困難となってきた現在の、「断絶」を前提にした「戦争の記憶」の語りが必要とされている。

3.2 「新しい戦争」の時代

過去の「戦争の記憶」の議論と並行して、現在起きている戦争に関する議論もある。代表的な論者・論考がメアリー・カルドー[2003]である。彼女はボスニア・ヘルツェゴビナの紛争を分析し、クラウゼヴィッツらが論じてきた戦争は「旧い戦争」であり、現状は「新しい戦争」に移行していると述べている。さらに、その「新しい戦争」の範疇で、2001年の<9・11>も考察することができるとしている。

カルドーによれば、「旧い戦争」とは、「中央集権的で、「合理的」とみなされ、階層的に秩序付けられた領土に基づく近代国家を建設するためのものと考えられてきた」(22) のであり、「暴力は政治目的を達成するための軍事的機能を有していた」(279)。しかし、グローバリゼーションが進行しアイデンティティ・ポリティクスが重要視される現代においては、「新しい戦争」は「アンデンティティに基づいた政治的動員」を目標とし、「それを達成するための軍事的な戦略は、異なるアイデンティティ集団を除去し、憎悪と恐怖を助長することを目的」としていると論じる(181)。<9・11>に関しても、「暴力は恐怖と不安に満ちた雰囲気を作り出し、過激派の掲げる大義に対する人々の支持を動員することを目的としていた」(279)と分析し、「新しい戦争」として捉えている。

3.3 新旧の戦争と「越境」の関係性

「旧い戦争」についての「戦争の記憶」と、「新しい戦争」の言説が同時に前景化しているのが現代における戦争の表象である。そしてその複雑に絡み合

った戦争表象が——カルドーがグローバリゼーション以降としてこの問題を論じていることと密接に関連するわけだが——「越境」表象とも結びついている。

リービ英雄が<9・11>を描いた私小説『千々にくだけで』はその具体例であろう。日本からカナダ・バンクーバー経由でニューヨークに向かおうとしていた主人公は、<9・11>の発生によってバンクーバーに足止めされてしまう。その際、飛行機内で隣席だった日本人の老婆は、第二次大戦時の「戦争の記憶」を抱え持つ人物であり、その記憶を主人公に語りかける。<9・11>を始めとする「新しい戦争」にまつわる表象においても、過去の「集合的記憶」(アルヴァックス)をめぐる「断絶」／「継承」という問題が入れ子状になって顕現している。「断絶による継承」が「越境」の表象と結節していることこそ、考察すべきである。

4. 非政治的な「デタッチメント」

4.1 村上春樹の言説から

続いて、「越境」／「戦争の記憶」の二つの表象体系を結ぶものとしての「非政治的デタッチメント」という概念を提唱したい。友と敵が分かれるところに政治の本質は胚胎するとのシュミットの見解に従いつつ、その友／敵の二項対立的な構図からの離脱＝非政治的態度こそ「越境」と「戦争の記憶」の現状を考えるうえで有効だと考える。それは一方では「越境」における「はざま」の議論に繋がり、他方では「戦争の記憶」における「断絶」の逆説的な可能性に関連している。

そして、その非政治的な「越境」／「戦争の記憶」をめぐる表象の立場を、より明確に示唆してくれるのが村上春樹の「デタッチメント」という概念である。ここで付言しなければならないのは、阪神淡路大震災とオウム真理教によるテロ事件以降、現実社会への「デタッチメント」から「コミットメント」へと移行したと一般的に考えられているその構図自体も再考されねばならないということだ。彼は単純に現実世界への「コミットメント」に転向したわけではなく、むしろ、その転向点は「デタッチメント」を徹底させた地点にこそあったのではないかという

¹ ここで取り上げた「断絶」の世代を整理すれば、①戦中世代、②学生闘争の中心となった団塊世代、③その子どもたち以降の世代、といった区分となる。

のが筆者の考えである。

村上は自らの「コミットメント」という立場を明確に以下のように述べている。

コミットメントというのは何かというと、人と人との関わり合いだと思うのだけれど、これまでにあるような、「あなたの言っていることはわかるわかる（ママ）、じゃ、手をつなごう」というのではなくて、「井戸」を掘って掘って掘っていくと、そこでまったくつながるはずのない壁を越えてつながる、というコミットメントのありように、僕は非常に惹かれたのだと思うのです。（河合・村上、84）

「あなたの言っていることはわかる」という素朴な理解のもとに「じゃ、手をつなごう」と他者と接続する回路を村上は拒んでいる。彼の作品中に繰り返し登場する、外壁に囲まれた「井戸」に象徴されるように、他者の理解不可能性、現実社会への接続不可能性という「デタッチメント」を徹底した果てに「まったくつながるはずのない壁を越えて」現実社会と再度接続する「コミットメント」がある。村上作品の主人公たちは「越境」を果たし、また接続するはずのない過去の「戦争の記憶」に繋がるのだ。

4.2 「開かれた状態」という「デタッチメント」

鈴木智之[2009]は、村上春樹の作品に描かれる「開かれた状態」を論じている。鈴木は『ねじまき鳥クロニクル』を分析する中で、失踪した妻との記憶をたどり直し、物語 narrative という意味秩序（因果連関）を再構築しようとする主人公においては、物語の秩序が解除され、あらゆる潜在的な可能性に向けて「物語が過去に向かって開かれた状態」になっているという。

「井戸」の底の暗闇へと下りていった「僕」が求めたものは、この「開かれた状態」に自らを差し戻し、そこから物語の「起点」をとらえ直すことだった。しかし、この開放の時点から、再び閉じた意味連関が見いだされて物語的な秩序が回復されるまでの間、語り手である主体はきわめて脆弱

な状態に留まることになる。そこでは、出来事の意味連関の遡及は果てしなく遠くまで、また幾通りにも可能である。潜在的には、すべての「過去」が、いまこの「私」が生きている現在に結び付き、そこに生じつつある出来事との関連性を訴える。

「私」の記憶は、想起可能な過去のどの断片も「無関与」なものとして背景化することができない。（271-73）

この「戦争の記憶」を含めた過去に「開かれた」自己は、通時的にだけ「開かれ」ているわけではない。リービ英雄らの「越境」を語るときに青柳悦子が強調しているのは、私小説としての彼らの作品はしかし、狭隘な自己に閉じこもることのない新しい私小説であり、「自己を客体化するまなざしをもち、自己と周囲の他者たちをそれぞれに位置づける歴史的＝社会的な視野を備え、とりわけ自己および他者を「関係性」のなかにおいて照らしだそうとするような私小説」（26）という点だ。ここには共時的に「開かれ」た状況がある。

つまり「越境」と「戦争の記憶」が、現実社会からの「デタッチメント」のもとに折り重なって表象される現在においては、通時的／共時的双方の自己の「開かれ」——現実への再度の「コミットメント」が見受けられるのだ。そしてその在り方は、決してマイノリティとしての狭義の越境者たちに限定されたものではなく、グローバリゼーションの最中にあるマジョリティにも可能なものである。

5. 終わりに

以上、「越境」と「戦争の記憶」の表象を、非政治的な「デタッチメント」に収斂させる形で考察してきた。今後の課題としては、「越境」と「戦争の記憶」に関して、現代日本文学を中心に考える際、沖縄文学、安倍公房ら旧満州からの引揚者たちの文学、中上健次が「路地」を描いた作品群、在日文学といった一連の文学を、どう位置づけるのかということが揚げられる。その布置を確認しながら2001年以降の「越境」と「戦争の記憶」を捉え直すことを、今後の作業としたい。

参考資料

- 青木保 『『日本文化論』の変容』 中公文庫 1999
- 青柳悦子 「複数性と文学—移植型＜境界児＞リービ英雄と水村美苗にみる文学の渴望」(『言語文化論集』 筑波大学現代語・現代文化学系 第 56 号 2001)
- 安部公房 「内なる辺境」(『内なる辺境』 新潮文庫 1975)
- 今福龍太 『クレオール主義』 ちくま学芸文庫 2003
- 大澤真幸・北田暁大 『歴史の〈はじまり〉』 左右社 2008
- 河合隼雄・村上春樹 『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』 新潮文庫 1998
- 川上未映子・多和田葉子 「からだ・ことば・はざま」(川上未映子 『六つの星 川上未映子対話集』 文藝春秋 2010)
- 下嶋哲郎 『平和は「退屈」ですか—元ひめゆり学徒と若者たちの 500 日』 岩波書店 2006
- 管啓次郎 『オムニフォン—〈世界の響き〉の詩学』 岩波書店 2005
- 鈴木智之 『村上春樹と物語の条件—『ノルウェイの森』から『ねじまき鳥クロニクル』へ』 青弓社 2009
- 田中敬子 「アーキペラゴとボーダーランド—文学需要の越境論をめぐる」(『人間文化研究所年報』 第 2 号 名古屋市立大学人間文化研究所 2007)
- 多和田葉子 『エクソフォニー—母語の外へ出る旅』 岩波書店 2003
- 富山一郎他 「座談会 越境する文化・崩される知の体系—ポスト植民地主義(コロニアリズム)のアイデンティティ」(『世界』 岩波書店 1996 年 7 月号)
- 福間良明 『「戦争体験」の戦後史 世代・教養・イデオロギー』 中公新書 2009
- リービ英雄 『日本語の勝利』 講談社 1992
- 『千々にくだけて』 講談社 2005
- グロリア・アンサルドゥーア 管啓次郎訳 「ボーダーランズに生きるとき きみは」(『へるめす』 岩波書店 1991 年 7 月号)
- エヤル・ベン-アリ 関沢まゆみ訳 「戦争体験の社会的記憶と語り」(関沢まゆみ編『戦争記憶論—忘却、変容そして継承』 昭和堂 2010)

- ヴァルター・ベンヤミン 「歴史の概念について」(浅井健二郎編訳 久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』 ちくま学芸文庫 1995)
- 「言語一般および人間の言語について」(同上)
- 「翻訳者の使命」(浅井健二郎編訳 三宅晶子他訳『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』 ちくま学芸文庫 1996)
- ジャン・ベルナル／パトリック・シャモワゾー／ラファエル・コンフィアン 恒川邦夫訳 『クレオール礼賛』 平凡社 1997
- パトリック・シャモワゾー＋ラファエル・コンフィアン 西谷修訳 『クレオールとは何か』 平凡社 1995
- テッド・コノヴァー 管啓次郎訳 『コヨーテたち—越境するヒスパニック・アメリカ』 弘文堂 1989
- デイヴィッド・ダムロッシュ 秋草俊一郎他訳 『世界文学とは何か?』 国書刊行会 2011
- ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ 宇波彰／岩田行一訳 『カフカーマイナー文学のために』 法政大学出版局 1978
- ジャック・デリダ 守中高明訳 『たった一つの、私のものではない言葉—他者の単一言語使用』 岩波書店 2001
- エドゥアル・グリッサン 管啓次郎訳 『〈関係〉の詩学』 インスクリプト 2000
- M.アルバックス 小関藤一郎訳 『集合的記憶』 行路社 1989
- メアリー・カルドー 山本武彦・渡部正樹訳 『新戦争論—グローバル時代の組織的暴力』 岩波書店 2003
- C.シュミット 田中浩／原田武雄訳 『政治的なものの概念』 未来社 1970
- G.C.スピヴァク 上村忠男・鈴木聡訳 『ある学問の死—惑星的思考と新しい比較文学』 みすず書房 2004
- Dimock, Wai Chee. *Through Other Continents: American Literature Across Deep Time*. Princeton: Princeton UP, 2006

(Received: May 31, 2013)

(Issued in internet Edition: July 1, 2013)